「きたみ菊まつり」の歴史と未来

The history and future of the Chrysanthemum Festival in Kitami.

岡直哉　Naoya Oka*
加藤由紀子　Yukiko Kato**

キーワード：北見市　菊　地域資源の活性化

1. はじめに

本研究は、北見市で毎年開催される「きたみ菊まつり」の意義を再認識し、北見市民のみならず市外の人々、また増大するインバウンド客にも興味を持って見に来てもらえる祭りを目指すために、菊を利用した新コンテンツの提案をするものである。今回私が、地元である北見市について研究しようと考えたきっかけは、大学などで北見市について聞かれた時、いつも思い浮かぶのは“玉ねぎ”“ハッカ”“焼肉”などであり、農産物以外で北見市を説明できないことが情けなく感じられた経験があるためである。

北見について取り上げられることと言えば、新聞などで報道された「断水」「ガス漏れ事故」などあまり良い話題とは言えないため、今後、北見市はどうなるのかと不安に感じている市民も多数いると考える。このままでは市外の方はもとより、北見市民も北見に対して魅力を感じないと私は考え、まずは自分が北見について知ることが必要だと感じ、北見市で開催される祭りの中で最も長い歴史がある「きたみ菊まつり」に着目した。

2. きたみ菊まつりの歴史

きたみ菊まつりは 1953（昭和 28）年から始まり、2015 年で 63 回目となる歴史ある祭りである。きたみ菊まつりは、1953 年、当時の市長の伊谷半次郎氏が、「戦後の殺伐とした時代に、心を和ませるものはないのか」と考え、開拓に苦労を重ねたお年寄りをねぎらい、何よりも市民に楽しんでもらうために､出身地である滋賀県の伝統行事であった菊まつりを再現しようと提案し、職員を四国の高松に派遣したのが始まりである。

ところで北見市の市の花は菊である。菊は市の花を決める市民へのアンケート調査で一位となったこと、菊まつりは全国的に人気があり、市の花としてのイメージが定着していたこと、栽培のやさしいものから難しいものまであり素人からマニアまで楽しめることを理由に、1979(昭和54)年、第 27 回菊まつりの年に北見市の市の花に選定された。

2-1　菊まつりの概要

菊まつりは毎年 10 月中旬から 11 月の初めごろまでの半月ほどの間に開催される。開催期間中には菊花展、菊人形展、菊花コンクール展、きたみ物産まつり等の催し物を行っている。

第 63 回きたみ菊まつりは、2015 年 10 月 15 日（木）~11 月 1 日（日）に北見芸術文化ホール前と北見駅南多目的広場を会場に、各日午前 10 時から午後 4 時まで開かれた。北見市菊花試験栽培センターなどで栽培された菊での菊花展、NHK 大河ドラマをメインとした菊人形展、さらに市民などが出品する菊花コンクール展も開催された。また、祭りの終了に伴い、会場内で展示

*北海商科大学商学部　3 年　　**北海商科大学商学部　教授

された小菊の即売会も行なわれた。（写真１　第 62 回きたみ菊まつり日程）

写真１　第 62 回きたみ菊まつり日程　筆者撮影

この北海道内で最大級の菊まつりを特徴づけるのは、菊人形である。菊人形とは菊の衣装を着た、ヒトとおなじ大きさの人形で、菊人形「興行」のためにつくられたものである。

北見の菊人形は 1957（昭和 32）年の第 5 回に枚方市から人形師を招き、道内で初めて作製された。以降、旭川市、岩見沢市など道内各地の菊まつりでも菊人形が取り入れられた。1963(昭和 38)年の第 11 回、翌年の第 12 回には電動で手足が動く菊人形も設けられ、来場者から注目された。1967(昭和 42)年の第 15 回には来場者が札幌市、釧路市、留萌市などから貸切バスで訪れ、会場の小公園は身動きができなくなるほど混雑したという。多い時には入場者が 20 万人台であったという資料も残っている。

2-2.　菊人形の製作

まず、菊師と呼ばれる菊人形に衣装を着せる職人が、枝をやわらかく、花が先に集まるように栽培された菊人形のために特別に栽培された菊を、10 本ぐらいの束で、3 段ほどの段差をつけ花束にし、輪ゴムで止めて束にした「玉」と呼ばれるものを作る。次に、その花束を木で作った菊人形の骨格の隙間に、花を下に根を上にして差し込んで作製する。

完成した菊人形には菊が枯れるのを防ぐために、一日一回から二回、水をやる必要がある。その際、束になっている菊の根一つ一つに水をやらなければ、一部分だけが枯れてしまい、着せ替えをしなければならなくなるため、細心の注意が必要である。気候にもよるが、菊は生きているため、水やりをしても一週間から十日しかもたない。そのため、傷んだ菊を全てはずして、一から菊を着せ替えるといった作業も必要である。このように菊人形作製はとても手間がかかる作業である。

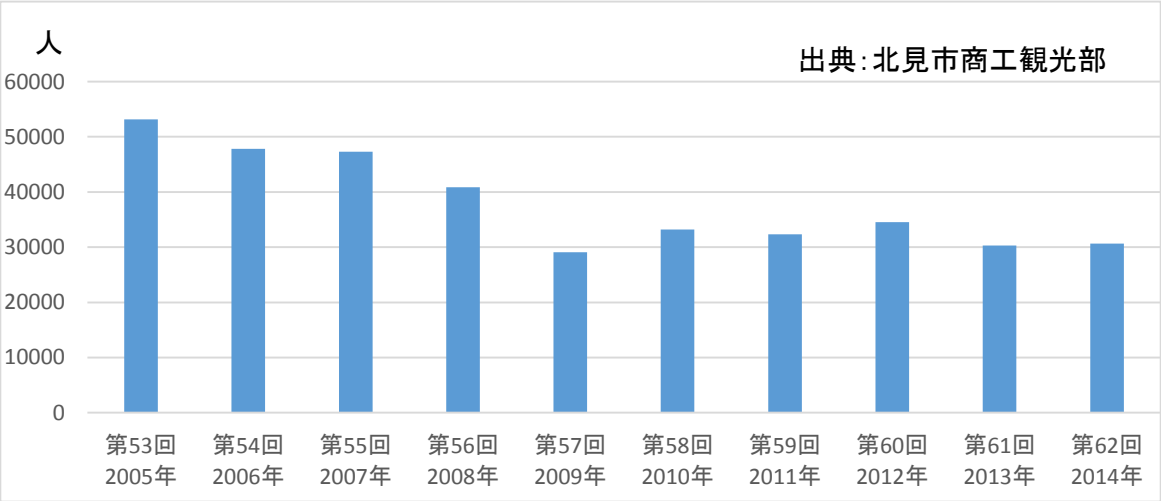
ところで、これほど手間がかかる作業を一体誰が行っているのか、というと、北見の菊人形を作製しているのは「北見菊人形着付け会」の方々である。菊人形着付け会は 1990(平成 2)年、第

38 回の年に発足し、現在は約 9 人で毎年菊まつり開催前の 7 日～８日間に、２６体程の菊人形を作製している。祭り期間以外には、初心者の研修や次の年の菊人形のアイディアを考えている。

今回、私は北見菊人形着付け会の小川さんにお話を伺ってきた。小川さんは着付け会発足前も含めると約 30 年、菊人形作製に携わっているベテランの方である。小川さんはインタビューで、「最初は、菊人形技師を呼んで指導を受けていたが、予算の関係もあり 1990(平成 2)年、第 38 回の年以降、山形から菊人形技師を呼べなくなり、自分たちで作らなくてはならなくなった。当初はとてもお客さんにお金を払って観てもらう程のものではなかった。複雑な形の人形を作製するのにとても苦労したが、来場客の“綺麗ですね”という言葉が聞けてやっていて良かったと思う。祭り期間以外でも次の年の菊人形のアイディアのために、NHK のドラマを観たりと日々勉強することで、年々改良を重ねている。今ではどんなに複雑な形の菊人形でも作る自信がある。」とおっしゃっていた。このようにきたみ菊まつりには長い伝統、歴史を支える人達がいる。

3. 菊まつりの課題

菊まつりは、2005(平成 17)年に北見の総人口のおよそ半分の 53,000 以上の集客があったが、現在二つの大きな課題に直面している。一つ目は、来場した年齢層の殆どが年配の方であり、このままでは祭りの継承があやぶまれること。二つ目は、これ程大規模で歴史ある祭りにもかかわらず、認知度が低いため、このままでは入場者が減っていくことである。菊まつりの過去 10 年の観客数のデータは以下の通りである。（グラフ１）



グラフ１　菊まつりの観客数　出所北見市商工観光部

このように、過去 10 年間の観客数を見ても観客数は減少傾向にある。このままではますます停滞してしまうので、若年層への伝承、展示場所の拡大について提案する。

4. 菊まつりへの提案

4-1　伝承方法

まず、若年層への菊への認識の拡大を目指すために、市内の小中学生に北見のハッカの歴史だけでなく、菊まつりの歴史を学ぶ機会を与え、実際に各学校で学校ごとに菊を育てて祭りに展示し、そのなかでコンテストを行って優秀賞を決める、という方法を提案する。実際に昨年、南小学校

などの市内の小学校では菊まつりの見学を行った。こうすることで、地元伝統の祭りについて考えるきっかけを作り、年齢を問わず多くの北見市民が参加し、北見市民が盛り上げる祭りを目指すことができる。また、近年増加傾向にある台湾人観光客などのインバウンド客増加対策として、台湾などの国の民族衣装を菊人形で再現する、という方法を提案する。

一方、菊人形作成の技術の伝承、後継者問題対策としては、北見菊人形着付け会の技術を伝承する仕組みをつくる。仕組みとして、①法人化すること、②出前授業を行うこと、などを想定している。

4-2.　認知度の向上

二つ目の課題である祭りの認知度が低いことを解消するためには、現在の会場である北見芸術文化ホール、北見駅南多目的広場だけでは場所に限りがあるので、北見駅、女満別空港に菊、菊人形の展示を行い認知度の向上を図る。まず北見駅には、外に菊の展示、駅構内に菊のフラワーカーペットを展示する。女満別空港には、すでに行われている菊人形の展示に加え、鉢植え菊の展示を行う。会場の分散に加え、菊を市民が集まる場所に常設展示を行うことでより多くの市民や観光客に菊のイメージを定着させることができよう。具体的には、北見駅前から北見日赤前小公園までの中央大通り沿い、ハッカ記念館、端野、常呂、留辺蘂地区に菊のシーズンには本物を他は写真などを展示し、常設展示を行う。

さらに、菊を利用した特産品の開発と販売に力を入れる。そのためには、食用菊と小豆を使用した和菓子を市内の企業と共同で開発し、菊まつり開催期間限定で販売する。開発に協力した企業は将来的には食用菊を利用したお菓子以外の食品加工につなげる。さらに、菊の苗の生産地化を目指し、祭りでの販売を積極的に行う。

ここで食用菊について説明しよう。昔は菊の酢のものや刺身と一緒に食べる習慣があったが、最近は殆ど菊を食べるという機会はない。ではなぜ菊を食べていたのか。菊を食べるとどのような効用があるのか。といったことを簡単に説明したいと思う。

菊は中国から、薬草として、特に不老長寿の効果を持つ薬草として、日本に伝わり、飲まれ、食べられていた。冷蔵庫の無い時代、なまの魚で食あたりしないように、不老長寿の意味を拡大解釈して、花びらを少々、さしみと一緒に「おなかが痛くなりませんように！」と食べたそうである。では実際どのような効用が菊にはあるか、というと、実際の菊の効用としては、美肌効果、アンチエイジング、デトックス、血圧、コレステロールの低下、肝機能の強化などがあり、菊は健康に良い食べ物である。（写真２　食用菊）

写真２　食用菊　筆者撮影

5.　結論

菊まつりを地域を代表する祭りとして市民に再認識してもらうためには、まず、観光客を増加させることが必要である。そのためには、道内観光客に対しては菊人形が北見市にしか存在しないことを、インバウンド観光客に対しては、菊人形が日本文化であることを強調し、観光客の増加を目指していくことが重要である。

次に、観客の層をお年寄りの方から子供まで広げるために、小学生の総合学習に結び付けていく。小学生に菊まつりの歴史を学ぶ機会与えたり、小学校を対象に、親子で菊まつりを体験できる取り組みを行う。また、菊人形作製の技術を伝承させるために、農業ボランティアや街づくりボランティアからメンバーを募る。

そうすることで、北見市民が自ら菊まつりについて語り合い、その結果、自信をもって北見のことを誇りに思うようになると考える。

参考文献

川井ゆう(2012)「わたしは菊人形バンザイ研究者」新宿書房

北見市長　神田孝次(2007)「北見現代史」(株)小林印刷　ｐ446～p451

(2016年7月31日受理)